

漢語「一所」の受容と意味変化

著者	鳴海 伸一
雑誌名	言語科学論集
巻	10
ページ	48(13)-37(24)
発行年	2006-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/48303

漢語「一所」の受容と意味変化

鳴海伸一

キーワード：一所、国語化、空間的意味、副詞化、死なば一所

要旨

漢語の国語化の一例として、漢語「一所」をどのように受容し、空間的意味を喪失して副詞化していったかを記述した。中国文献の「一所」を、和語の「一（ひとつ）」の意味の影響の強い形で受容した。その後、中世に「死なば一所」から「行動を共にする」意味が生じ、それが「一所」の副詞用法に含意されるようになった。さらにその後空間的意味が薄れることで現代の用法へと近づいていく。

一 はじめに

「いっしょ」は、現代は「一緒」と表記し、主に副詞的に「共同で動作する」ことを表す。しかし古くは「一所」と表記し「一つの場所」を表していた。それでは、いつどのようにして「一所」が「一緒」の意味へと変化したのか。

「一所」は元来、漢語の「一所」を受容したものである。

それが、「一所」の形で多様されるうちに、原義の空間的意味を失い、副詞としての機能を強めていったと考えられる。つまり、中国から受容した漢語が、原義を離れて日本独自の変化を遂げた、漢語の国語化の現象と捉えられる。

従来、「一所」の意味の歴史的变化については、中世の「一所懸命」との係わり合いから論じられてきたようである。しかし、「一所」の意味変化は、「一所」内部の問題であり、「一所懸命」が「一生懸命」へと変換することと同列に論じることは出来ない。^{注1}

本稿では漢語の国語化の一例として、「一所」を中国文献から日本語へ受容し、空間的意味を喪失して副詞化していく過程を記述することを目的とする。

なお、「所」と「處(処)」の字義は全く同じではないが、互に通ずる字であり、「一所」「一處(処)」において両者に意味の違いは認められない。本稿では、同じものとして扱い、説明の際には「一所」で代表させる。

二 中国文献における「一・所」

「一・所」という表現は中国文献に用例がある。漢語「一・所」を日本においてどのように受容したのか、ということを考えるために、中国文献において「一・所」がどのように使用されているかを見てみる必要がある。

漢籍・仏典に見られる「一・所」の用例は、以下のようなものである。^{注2}

- 1 臣意即灸其足趺陰之脈、左右各一・所、即不遺溺而溲清、小腹痛止。
(史記、扁鵲倉公列伝第四十五)
- 2 兄弟離散。各在一・處。因望月有感。
(白氏文集、卷第十三)
- 3 於塚間脱衣聚置一・處埋死人
(四分律、卷第三十九)

塚間に衣を脱(ぎ)て、一・處に聚(め)置(き)て、死人を埋ム。
(小川本願經四分律平安初期点)

- 4 應取諸香 所謂安息梅檀龍腦蘇合多揭羅薰陸 皆須等分和一・處
(金光明最勝王經、卷六)

諸の香(を)取(る)應(し)。所謂安息梅檀、龍腦、蘇合、多揭羅、薰陸なり。皆等分(し)て一・處に和合す須し。
(唐招提寺本金光明最勝王經平安初期点)

1は「左右各一・箇所に灸をすえる」という意味、2は「兄弟が離散して、別々のある場所に居る」という意味である。

いずれも「一・箇所」「ある場所」を表している。3は「衣を一・箇所に集める」という意味、4は「諸種の香を等分して一つに和合させる」という意味である。いずれも「一・箇所に集める、合わせる」ということを表している。

漢籍・仏典における「一・所」の用例数を表1・表2に示す。〈或〉は「ある場所」の用法、〈集〉は「一・箇所に集まる」意味の用法を表す。^{注3}

表1 漢籍

	或	集
詩經	30	2
楚辭	0	0
墨子	1	0
史記	15	0
漢書	6	0
文選	11	0
玉台新詠	0	0
白氏文集	4	0
唐詩選	0	0
三体詩	0	0

表2 仏典

	或	集
願經四分律	141	7
成実論	14	0
金光明最勝王經	4	1
大智度論	49	5
地藏十輪經	1	0
成唯識論	6	1
南海寄帰内法伝	1	0
蘇悉地羯羅經	4	1
冥報記	2	0
大唐西域記	3	0

三 日本への受容と変容

中国における「一所」を受容し、日本においても上代から例が見られる。

5 答自吾身者、成成不成合處一所_ニ在。

(古事記、上巻)

6 但一所_ノ之湯 其穴似井

(豊後国風土記、日田郡)

7 如何久居一所_ニ、無以制変。乃徒宮於別處。

(日本書紀、卷第三、神武天皇)

8 召聚衛門府於一所_ニ、將給祿。

(日本書紀、卷第二十四、皇極天皇)

5は「未完成な所が一箇所ある」という意味で、6は「ある場所の湯は、穴が井に似ている」という意味である。7は「同じ一つの場所に在る」という意味であり、直後の「別處」に對置されている点が注目される。中国文献における「一所」が単に「ある場所」といった程度の意味であつたのに對し、この例は「同一」という意味が強く表れたものといえる。2において、兄弟が同じ場所に在ることではなく、離散して別々の場所に在ることについて「一處」が使用されていることと對照的である。8は3と同様の用法と見られ、「衛門府を一箇所に集める」ことを表したものである。

中古に入つても古記録・古文書といった漢字文献では、引き続き「一所」が見られるが、他の文献とは傾向が異なる。

9 仁王会事内府定之、於大極殿一所_ニ、百講、来月二

日、(御堂関白記、寛弘三年四月二十七日)

10 師信申云、件浦田一所_ニ、北坪所在田三坪也、

(大宰府公文所勘文案、長元九年五月十日)

9は、大極殿という建物についての例、10は、土地についての例である。このように、古記録・古文書では、土地や建物に関する使用例が大多数である。特に古文書は、もともと所領に関する話題が多く、「一所」は頻出する。その多くは、10のように、「所」を助数詞として用いた定型表現である。

和文資料においては漢語「一所」に對應する和語の表現「ひと(つ)ところ」の例が見られる。

11 ひむがしの姫君も、うとくしく、かたみにも

てなし給はで、夜くは、ひとところ_ニに御殿ごもり、

(源氏物語、紅梅)

12 いとくるしくし給ふ程、「ひとところ_ニに、われさ

へかくて臥しぬれば、いとあしかりぬべし。いとう

しろめたくいみじかるべけれど、いかゞはせむ。

(夜の寝覚、巻二)

11は、「同じ場所で寝る」という意味で、12は、「(あなたと)同じ場所に臥している」という意味である。漢字文献の「一所」とは違い、和語の「ひとつ」の意味が強く出ている。単に「ある一つの場所」でなく、「他ではない同一のこの場所」という意味のものに用例は偏っている。7のように、上代から同様の例があることから、「一所」という表記の語を受容する段階で、「一」を和語の「ひとつ」に引きずられた形で受け入れ、それが「一所」の意味に影響したのだろう。和文資料の「ひと(つ)ところ」が、漢字文献の「一所」に用法的に対応するのもそのためである。「一」が「ひとつ」と意識されれば、単に「ある一つの場所」という意味の解釈はしにくくなる。そしてそれが中世以降の「一所(いっしょ)へ」と受け継がれていったのだろう。

また、上代に見られた「一箇所に集まる」意味を表す用例も多数見られる。

- 13 落窪の君と夢知らず、また「一所に参りつどはん事ともゆめ知らで、皆おのく隠しさゝめきなんしける。
(落窪物語、卷之三)

- 14 さべきをりはひとところ集りあて物語し、人のよみたりし歌、なにくれと語りあはせて、人の文など持て来るも、もろともに見、返りごと書き、また、むつまじう来る人もあるは、
(枕草子)

複数の人が一箇所に集まった様を表したものである。「一所に・ひとところに」の連用修飾の形で用いられ、複数の人が関わる点で、現代の用法に似てはいるが、共同で動作をする様を表したのではなく、いずれも集まった結果の事態を靜的に描写したものである。つまり、複数の人が限られた一つの空間を共有している、という意味の用法なのである。

ところで、この時代以降、特に平安和文においては、貴人を「所」で数える助数詞的な「一所」の用例が多数見られる。

- 15 かくてこの皇子は、「一生の恥、これに過ぐるはあらじ。女を得ず成ぬるのみにあらず、天下の人の、見思はん事の恥づかしき事」のたまひて、たゞ「ところ、深き山へ入給ぬ。
(竹取物語)

- 16 亭子の院に宮すん所たちあまた御曹司してすみ給に、としごろありて、河原の院のいとおもしろくつくられたりけるに、京極の宮すむどころひとところの御曹司をのみしてわたらせ給ひにけり。

(大和物語)

この用法は、「一所」の他の用法とは関わり無いが、後述するように、この用法をも含めて中世の「一所」へ受け継がれている点に注目できる。

表5 中古

	或	集	同	その他
性靈集	1	0	0	0
梁塵秘抄	1	0	0	0
竹取物語	0	0	0	1
大和物語	0	0	1	1
落窪物語	2	1	1	2
堤中納言物語	0	0	0	4
更級日記	0	0	1	0
かげろふ日記	1	0	1	0
源氏物語	0	1	5	36
枕草子	0	1	1	1
紫式部日記	0	0	0	1
浜中納言物語	0	0	0	7
夜の寝覚	0	1	5	7
狭衣物語	0	1	1	8
今昔物語集	0	2	3	1

表3 上代

	或	集	同	その他
古事記	2	0	0	0
風土記	16	0	0	0
日本書紀	11	2	2	0

表4 古記録(中古)

	その他
小右記	18
御堂関白記	3
貞信公記	1
九曆	0
中右記	18
後二条師通	12
殿曆	8

上代・中古は、中国文献の「一所」を「ある場所」「一ヶ所に集まる」の二つの用法で受容している。但し、「ある場所」の用法は、和語の「ひとつ」の意味が強い傾向が、特に中古の和文資料で顕著である。「ひと(つ)」と「ところ」も含めた上代・中古の用例数を、表3・表4・表5に示す。(同)は「同じ場所」を表す用法である。

四 含意としての「行動を共にする」意の発生
中世に入っても、前代までと同様の用法は引き続き使用される。

17 昔、博打の子の年わかきが、目鼻一所にとりよせたるやうにて、世の人にも似ぬありけり。

(宇治拾遺物語、巻九ノ八)

18 さればいかならん谷のそこ、岩木の陰にも身をかくしをきて、入道がならむやうをこそ聞はて給はめ。相構而いつしよへばしおちぬるな。一二人いかなる事にあふとも、残とゞまる者などか本意をとげざらん。(保元物語、中)

17は、目鼻を一箇所に集めたような様子であることを表している。18は、「同じところへは落ちのびるな」という意味である。いずれも、前代にもこのような例はあった。しかし、前代までの用法が、一箇所に集まった結果の状態を表したのに対し、これらの例は、一箇所に集まっていくことそのものを、過程を含めて動きを伴ったものとして表現している点が注目される。つまり、17は、目鼻が一箇所に集まっていく過程をも含んだ表現であり、18は、「同じ場所」へ落ちていく過程をも含んだ表現であると言える。

また、特筆すべきこととして、この時代の軍記物語に、死ぬことを表す用例が多数見られることが挙げられる。

- 19 栗屋川の次郎貞任が子息千代童子は、十二歳にて父といつしよにうち死をしけるとぞうけたまはる。

(平治物語、下)

- 20 頼朝は今年十四歳に成ぞかし。父といつしよにうち死をこそせざらめ、歳たけよはひかたむきぬるくちあまに命をこひ、たすからんといふは、無下にいふかひなき心かな。」といひければ、

(平治物語、下)

このようにまず『平治物語』に2例見られる。いずれも「同じ場所死ぬ」ことを表したものである。

そしてこのような用法が『平家物語』にも見られる。しかし、単に「同じ場所で死ぬ」ことではなく、「同じ場所で死ぬことを誓う」場合に、「同じ場所で死のう」という意思を表すものとして多用されているのである。

- 21 大納言がきられ候はんにおいては、成経とてもかひなき命をいきて何にかはし候べき。たゞ「しよ」でいかにもなるやうに申てたばせ給ふやうや候らん」と申されければ、

(平家物語、巻第二)

- 22 小太郎は足かばかりはれてふせり。「なむちがえおつかねば、しよ」で打死せうどて帰たるは、いかに」といへば、小太郎涙をはら／＼とながいて、

(平家物語、巻第八)

- 23 幼少竹馬の昔より、死なば「所で死なんとこそ契しに、ところ／＼」であつたれん事こそかなしけれ。

(平家物語、巻第九)

これらの例は、いずれも、死ぬときは同じ場所で死のうという意思を表明する場面のものである。

軍記物語においては、このような表現が使用され続け、中世後期になると、その表現が熟して「一所」だけで次のような表現が可能になるのである。

- 24 御曹司これを御覧じて、「憎し。一人も余すまじ。たんかいと連れて出る時は、一所とこそ言ひつらむ。きたなし、返し合はせよ」と仰せありければ、いとゞ足早にぞ逃げにける。

(義経記、巻第二)

- 25 義経を庇ひ、一人峰に留まらんと言ひしを、義経も留めん事をかなしみ、「一所にと千度百度言ひしに、侍の言葉は綸言にも同じ。

(義経記、巻第八)

同じ場所で死ぬためには、常に行動を共にしていなければならぬ。つまり、「一所」で死ぬことを誓うということは、死ぬまでのどの瞬間も「一所」にいることを誓うということ、死ぬまで行動を共にすることを誓うことになる。それが「死ぬ」などの表現を伴わなくとも「一所」自体に集約されて可能になった表現である。こうして、「一所」に「行動を共にする」意味が含まれるようになったと考えられる。

なお、前述のように、平安和文に見られた貴人を数える助数詞の用法が、中世の「一所」にも見られる。

- 26 院も此御有さまにては、兵共ありとも何の詮かは
あるべきとおぼしめされつれ共、さすが又ちり／＼
になりはて、只御いつしよのこらせ御座しければ、
御心ぼそくたのむかたなくおぼしめされける。

(保元物語、中)

- 27 よな／＼めされける程に、姫宮しよ出来させ給ひ
けり。(平家物語、巻第六)

これは、他の「一所」の用法と、意味的な関係はないが、これによって、中世の「一所」が、平安和文の「ひと(つ)ところ」から連続するものであることがわかる。

中世末期のキリシタン資料や抄物では、比較的古い用法のものが多く、特に、一箇所に集まる意味の用法が引き続き多数使用されている。

- 28 ドンナヤツハ一所へアツマルモノナリ

(句双紙抄)

- 29 聚散トハ、蚊は一所へヨツ、又チリモスルモノソ。

(湯山連句抄、陽韻)

- 30 手ヲ一所へヨセテ礼ラス

(論語抄、巻第二)

- 31 最前にげたもの共が、一所へあつまつた程に、事
の他多せいになつて、(虎明本狂言、空うで)

このように、多くが「一所へ」の形である点が注目される。「一所に」が同じ場所で動作を行う意味の副詞用法として意識され、一箇所に集まることを表す用法は、「一所十へ」の形で名詞用法と意識されるようになっていくのだろう。古記録においても、前代と同様、土地や建物に関する用例に限られる。

- 32 勸学院庄一所預給之、利秋悦申退出、

(猪隈関白記、建久八年四月二十三日)

- 33 猶々被召拔当庄一所之雑掌候之条、不審候、

(民経記、寛喜三年九月五日)

本節で述べたような用法は、中世の古記録・古文書にはほとんど見られないと言つて良い。

中世では、中古までの用法を受け継ぎつつ、動的な表現にまで用法が拡大した。そして、軍記物語の「死なば一所」という表現が多用され、「一所」自体に「行動を共にする」含意が生じた。それが「一所に」という副詞用法が「行動を共にする」意味を表す契機になったと考えられる。形式の面では、「同じ場所」の用法が、引き続き「一所に」の形で用いられるのに対し、「一箇所に集まる」意味の用法は、名詞と意識され、副詞化の流れから外れ、後の時代にも受け継がれない。中世の用例数を表6・表7・表8に示す。(死)は、「死なば一所」などの死に関わる用法である。

表8 室町時代

	或	集	同	死	その他
義経記	1	1	9	8	0
曾我物語	1	3	6	6	2
御伽草子	0	2	2	2	0
天草版平家物語	0	0	3	16	1
エンポのハブラ	0	2	0	0	0
論語抄	0	1	3	0	0
中華若木詩抄	1	0	1	0	0
句双紙抄	0	2	1	0	0
湯山連句抄	1	2	4	0	0
虎明本狂言	1	3	9	0	0

表6 鎌倉時代

	或	集	同	死	その他
宇治拾遺物語	1	2	0	0	0
保元物語	1	0	7	0	1
平治物語	3	0	6	2	0
平家物語	4	1	10	17	4
正法眼蔵随聞記	1	0	0	0	0
古今著聞集	1	1	1	0	3
沙石集	5	0	0	0	0

表7 古記録(中世)

	その他
岡屋関白記	4
深心院関白記	1
猪熊関白記	8
民経記	10
薩戒記	1
上井寛兼日記	20

五 「一所」の意味変化

さて、前節までに述べた流れを受けて、近世には「一所」は現代の用法に近づいていく。近世前期に少数ながら見られるのは、次のようなものである。

34 神変膏藥の手柄には、目と鼻と一所へ吸い寄せて、

眼玉二三寸は吸ひ上げたり。(竹斎、下)

35 今は昔、爰彼處の中間小者数多一所に集まりて、己々が主君の悪しき事共を互に語り出して諍る。

(浮世物語)

36 (…略…)さ程に思し召し候はゞ、永き契りとなり申べし。いざや一所に身を投げて、同じ蓮の縁となるべきよし仰せければ、

(きのふはけふの物語、下)

34と35は、共に「複数の物が一箇所に集まる」様子を表したものである。36は、「同じ場所で死ぬ」ことを表したものであり、中世に見られた「死なば一所」の用法を直接受けたものと考えられる。

近世も中期になると、「一所」の用例は多くなっていく。次に挙げるようなものである。

37 三人一所に昼も寝ながら手づから搔餅を焼て、それをなぐさみにしてゆく事ならば」と申す。

(好色一代男、巻五)

38 地 あれ又蛙が鳴きますと。いふ中に波介樽を潜つ

て庭の内主従一所に立休ふ。(鑓の権三重帷子)

39 尾張の杜国もよし野へ行脚せんと伊勢迄来(り)

候而、只今一所に居候。(芭蕉書簡、元禄元年)

いずれも、複数の人物が一箇所に集まつて何かをしている様子を表したものである。「複数の人が同じ場所にいる」ということを表現したものといえる。しかし、前代までの、「一ヶ所に集まる」意味の用法をもとにしたものではない。「同」の用法が、「一箇所に集まる」意味を含んだ形で継承されたものと考えられる。38・39の霊は、複数の人が一ヶ所に集まっているというよりは、空間を共有している複数の人の結びつきを表したものとみることが出来る。またその点で、現代の用法に比べて、空間的意味が強く残っているといえる。

それが、動きを伴う現象に適用したのが以下の用例である。現代と同じように、行動を共にする意のものである。

40 ハサアそなたは法華おれは浄土。願ふ所が別なれば先の行端も覚束なし宗旨を変へて一所に行かん今題目を授けてたも。(重井簡)

41 二良兵へ其元へ下候へ共、盤子・素牛と申兩人一所に付添為申候而、不自由成事無御座候間、御氣遣被成間敷候。(芭蕉書簡、元禄七年)

これらは、一見すると、「同じ行動をする」という意味を表している点で、現代と全く同じ用法のようにもみえる。しかし、いずれも行き先の明確な行動についての表現である点が特徴的である。40の例は、死後に結ばれること、41の例は、江戸へ東下すること、についての表現であり、そこまでの行動を共にするという意味である。例えば、現代に見られるような、「一緒に遊ぶ」「一緒に本を読む」といったような、共同で行動をするような例や、同じ動作をする例などは、この時代には見られない。あくまでも、明確な到着点と、そこへ共にたどり着くという明確な目的があるものである。近世に見られる用例は、このように、そこまでの行動を共にする、ということを表した用法に限られるのである。つまり、近世に見られるこの用法は、「複数の人が集まった状態で目的地へ向けて移動する」ことを表した用法であると言える。

前述のように、このような含意は、中世の「死なば一所」という表現によつて生じたと考えられるのである。共に死ぬ同じ場所へ向かつてそれまでの行動を共にする、というように考えられるからである。現代のように、「同じ動作を行う」ことを表すのではなく、目的地までの行動を共にすることを表したものである点で、「死なば一所」と共通するのである。

そしてこのような用法が多用されることで、「一所」の空間的意味が薄れていったと考えられる。それとともに、到着点を持たず、単に共に行動する場合や、同じ動作をする場合にも使用されるようになっていったのであろう。但し、この段階では、依然として「複数の人が空間を共有しながら移動する」という点で空間的意味を保持していると考えられる。

そして、それを人ではなく、物に関して使用するようになったのが次に挙げるような例である。

- 42 根許六 繪色紙いまだ不参候よし、御せハ被成早々遣可被下候。如行「一所」に奉頼候。

(芭蕉書簡、元禄六年)

- 43 其方が頼うだ塩商の損銀。かの金子で済して。請取手形も余金も「一所」に上した届いたかといへば。

(五十年忌歌念仏)

42の例は、絵色紙を許六へ送る際に、如行讃の分も合わせて送るように頼んでいる場面であり、43の例は、請取手形と余金をまとめて送ったという場面である。

いずれも、物がある場所へ送る行為に関する用例であるという点で、前述の、人が移動する用法と共通する。複数の物をひとつにまとめて、そのまま他の場所へ移動させる様子を表す用法といえる。

なお、この時期にも、「死なば一所」を含む死ぬことに關して用いられた用例もいくらか存在する。

- 44 望のとほり「一所」で死ぬるこのうれしさと いひければ。(曾根崎心中)

- 45 卯月五日の宵庚申。死なば「一所」と契りたる。其の一言は庚申。(心中宵庚申)

以上のように、近世の「一所」には、空間的意味が依然として残っており、現代のように、行動を共にする様子や、同じ動作をする様子を純粹に表す用法は無いことがわかる。それは、現代に通じる「行動を共にする」意味は、中世の「死なば一所」に端を発するものだからである。そのため、明確な到着点を持った行動に限られ、結果的に空間的意味が強く残ったものとなるのである。空間的意味が失われ、「死なば一所」の意味から離れていくのは、近世後期以降のことと考えられる。

以上に述べた、近世の用法をまとめると、次のようになる。用例集計を表9に示す。

- ・一箇所に集めることを表す用法……………《集》
- ・死ぬことに関わる用法……………《死》
- ・同じ場所にいることを靜的に表す用法……………《同》
- ・複数の人が空間を共有して移動する用法……………《共》
- ・複数の物をひとつにまとめて移動させる用法……………《物》

表9 江戸時代

	集	死	同	共	物
竹斎	1	0	0	0	0
浮世物語	1	0	0	0	0
きのふはけふのものがたり	0	1	0	0	0
鹿の巻筆	0	0	0	0	1
好色一代男	0	0	4	1	0
芭蕉書簡	0	0	5	2	2
近松世話物	1	5	13	13	4
傾城禁短気	2	0	6	4	0
新色五巻書	0	1	0	2	0
聞上手	0	0	0	0	1
鯛の味噌津	0	0	1	0	0
莫切自根金生木	1	0	0	0	0
卯地臭意	0	0	0	1	0

六 まとめと今後の課題

本稿では、漢語の国語化の一例として、「一所」を中国文献から日本語へ受容し、空間的意味を喪失して副詞化していく過程を記述した。

日本語の「一所」は、中国文献のものを「ある場所」の意味、「二ヶ所に集まる」意味の二つの用法で受容した。但し、「ある場所」の用法は、和語の「ひとつ」の意味を強めた形で使用される傾向が、特に中古の和文資料で顕著である。

中世になると、中古までの用法を受け継ぎつつ、動的な表現にまで用法が拡大した。そして、軍記物語の「死なば一所」という表現が多用されることで、「一所」自体に「行動を共にする」含意が生じた。それが「一所に」という副詞用法が「行動を共にする」意味を表す副詞になる契機になったと考えられる。「二箇所に集まる」意味の用法は、名詞と意識され、副詞化の流れから外れ、後の時代にも受け継がれない。

近世になると、行動を共にする意味の用法が多く使用されるようになる。しかし、空間的意味が依然として残っており、現代のように、行動を共にする様子や同じ動作をする様子を純粹に表す用法は無い。それは、現代に通じる「行動を共にする」意味は、中世の「死なば一所」に端を発するものだからである。そのため、明確な到着点を持った行動に限られ、結果的に空間的意味が強く残ったものとなるのである。

さらに空間的意味が失われ、行動を共にする意味の用法が「死なば一所」の意味から離れていくのは、近世後期以降のことと考えられる。近世後期以降の「一所」の意味変化や、「一緒」の表記との結びつきに関しては、別項を期したい。

注

- 1 鈴木則郎(一九八三)は、「土地所有の觀念の強い「二所懸命」や同一の場所を意味する「二所」という語は、場所の觀念を失った「一生懸命」や「二緒」にとつて代わられるのである。」と述べる。つまり、中近世に「二所懸命」から「一生懸命」へと変化したことと、「二所」が場所の觀念を失うことを結びつけて説明するのである。しかし、「二所」「ひと(つ)」という表現は上代から多数見られるのに対し、「一所懸命」は今回調査した資料にはほとんど見られない。「二所懸命」の用例は『太平記』に3例あるものの、それ以前の資料には、軍記物語にも見られない。しかも『太平記』の3例も「一所懸命の地(所領)」という表現である。中世の「一所懸命」は、武士が自分の所領に命を懸ける様を表した、いわゆる思想用語なのであり、「二所」のように頻繁には出現しない。
- 2 対応する訓点資料がある場合には、対応箇所を示した。
- 3 漢籍は唐代までの主要な資料を調査した。仏典は、漢語の日本語への受容という点で重要な訓点資料の残っているものを選んだ。

参考文献

- 鈴木則郎(一九八三)「いっしょうけんめい(一生懸命)」(佐藤喜代治編『講座日本語の語彙』第9巻、明治書院)
- 鈴木則郎(一九九一)『平家物語』における「一所懸命」の表現」(片野達郎編『日本文芸思潮論』桜楓社)

依拠した文献

- 平岡武夫・今井清『白氏文集歌詞索引』(同朋舎、一九八九) 小尾郊一・高志真夫編『玉台新詠索引』(山本書店、一九七六) 禪文化研究所編『唐詩選三体詩総合索引』(一九九二) 坂詰力治『論語抄の国語学的研究』(武蔵野書院、一九八四) 来田隆『湯山連句抄本文と総索引』(清文堂、一九九七) 来田隆『句双紙抄総索引』(清文堂、一九九一) 深野浩史『中華若木詩抄文節索引』(笠間書院、一九八三) 江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引』(明治書院、一九八六) 大塚光信・来田隆『エソボのハブラス本文と総索引』(清文堂、一九九九) 池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究』(表現社、一九八三)
- 漢籍の用例の検索には、台湾中央研究院「漢籍電子文獻」を利用した。
- 仏典の用例の検索には、CBETA 中華電子佛典協會のCBReaderを利用した。
- 古記録・古文書の用例の検索には、東京大学史料編纂所データベースを利用した。
- 右以外の資料については、岩波書店『日本古典文学大系』を使用し、用例の検索には国文学研究資料館の日本古典文学本文データベースを利用した。